

迷子

泉鏡花

青空文庫

お孝が買物に出掛ける道だ。中里町から寺町へ行かうとする突當の交番に人だかりがして居るので通過ぎてから小戻をして、立停つて、少し離れた處で返つて見た。

ちやうど今雨が晴れたんだけれど、蛇の目の傘を半開にして、うつくしい顔をかくして立つて居る。足駄の緒が少し弛んで居るので、足許を氣にして、踏揃へて、袖の下へ風呂敷を入れて、胸をおさへて、顔だけ振向けて見て居るので。大方女の身でそんなもの見るのが氣恥かしいのであらう。

ことの起原といふのは、酔漢でも、喧嘩でもない、意趣斬でも、竊盜でも、掬りでもない。六ツばかりの可愛いのが迷兒になつた。

「母様は何うした、うむ、母様は、母様は。」と、見張員が口早に尋ね出した。なきじやくりをしいしい、

「内に居るよ。」

「巡査は交番の戸に凭懸つて、

「お前一人で來たのか、うむ、一人なんか。」

頷うなづいた。仰あふむ向むいて頷うなづいた。其その膝ひざ切きりしかなないものが、突つ立たつてる大だいの男をとこの顔かほを見み上あげるのだもの。仰あふむ向むいて見みざるを得えないので、然しかも、一ちよつと寸ぐらゐ位ゐでは眼めが届とどかない。頤おとがひをすくつて、身みを反そらして、ふツさりとする髪かみが帯おびの結むす目びめに觸さるまで、いたいけな顔かほを仰あふむ向むけた。色いろの白しろい、うつくしい兒こだけれど、左さ右みぎとも眼めを煩わづらつて居ゐる。細ほそくあいた、瞳ひとみが赤あかくなつて、泣ないたので睫まつげが濡ぬれてて、まばゆさうな、その容ようす子すツたらない、可かれん憐れんなんで、お孝かうは近ちかづいた。

「一體いったい何ど處この兒こでございませう。方ほう角かくも何なにも分わからなくなつたんだよ。仕しやう様やうがないことね、ねえ、お前まへさん。」

と長屋ながやものがいひ出すと、すぐ應おうじて、「ちつとも此この邊へんぢやあ見み掛かけない兒こですからね、だつて、さう遠ゑん方ほうから來くるわけはなしさ、誰どなた方か御ご存ぞんじぢやありませんか。」

誰たれも知しつたものは居ゐないらしい。

「え、お前まへ、巾きんちやく着つでも着つけてありやしないのかね。」

と一人ひとりが踞つくばつて、小ちひさいのが腰こしを探さぐつたがない。ぼろを着きて居ゐる、汚きたない衣服きもので、眼め垢あかを、アノせつせと拭ふくらしい、兩りやう方ほうの袖そでがひかつてゐた。

「仕様ががないのね、何にもありやしないんですよ。」

傍に居た肥つたかみさんが大きな聲で、

「馬鹿にしてるよ、こんな兒にお前さん、札をつけとかないつて奴があるもんか。うつかりだよ、眞個にさ。」

とがむしやらかなものいひで、叱りつけたから吃驚して、わツといつて泣き出した。何も叱りつけなくツたつてよささうなもんだけれど、蓋し敢てこの兒を叱つたのではない。可愛さの餘り其不注意なこの兒の親が、恐しくかみさんの癩にさはつたのだ。

「泣くなよ、困つたもんだ。泣くなつたら、可いか、泣いたつて仕様ががない。」

また一層聲をあげて泣き出した。

中に居た休息員は帳簿を閉ぢて、筆を片手に持つたまゝで、戸をあけて、
「何處か其處等へ連れて行つて見たらば何うだね。」

「まあ、もうちつと斯うやつとかう、いまに尋ねに來ようと思ふから。」

「それも左様か。おい、泣かんでも可い、泣かないで、大人しくして居るとな、直ぐ母様が連れに來るんぢや。」

またアノ可愛いふりをして、頷いて、其まゝ泣きやんで、ベソを搔いて居る。

風が吹くたびに、糖雨を吹きつけて、ぞつとするほど寒いので、がたくふるふるのを見るとき、お孝は堪らなかつた。

彌次馬なんざ、こんな不景氣な、張合のない處には寄着はしないので、むらがつてるものの多くは皆このあたりの廣場でもつて、びしょく雨だから風を引摺つてた小兒等で。泣くのがおもしろいから「やい、泣いてらい！」なんて、景氣のいゝことをいつて見物して居る。

子守がまた澤山寄つて居た。其中に年嵩な、上品なのがお守をして六つばかりの女の兒が着附萬端姫様といはれる格で一人居た。その飼犬ではないらしいが、毛色の好い、耳の垂れた、すらつとしたのが、のつそり、うしろについてたが、皆で、がやくいつて、迷兒にかゝりあつて、うつかりしてる隙に、房ざりと結んで上げた其姫様の帯を銜へたり、八ツ口をなめたりして、落着いた風でじやれてゐるのを、附添がつと見つけて、びつくりして、叱！ といつて追ひやつた。其は可い、其は可いけれど、犬だ。

悠々と迷兒のうしろへいつて、震へて居るものを、肩の處ペろりとなめた。のはうづに大きな犬なので、前足を突張つて立つたから、脊は小ぼけな、いぢけた、寒がりの、

ぼろツ兒より高いので、いゝ氣になつて、垢染みた襟の處を赤い舌の長いので、ペロリとなめて、分つたやうな、心得てゐるやうな顔で、澄した風で、も一つやつた。

迷兒は悲さが充満なので、そんなことには氣がつきやしないんだらう、巡查にすかされて、泣いちやあ母様が來てくれないのとはばかり思ひ込んだので、無理に堪へてうしろを振り返つて見ようといふ元氣もないが、むず／＼するので考へるやうに、小首をふつて、促す處ある如く、はれぼつたい眼で、巡查を見上げた。

犬はまたなめた。其舌の鹽梅といつたらない、いやにべろ／＼して頗るをかしいので、見物が一齊に笑つた。巡查も苦笑をして、

「おい。」とさういつた。

お孝は堪らなかつた。かはいさうで／＼かはいさうでならないのを、他に多勢見て居るものを、女の身で、とさう思つて、うちちやつては行きたくなし、さればツて見ても居られず、ほんとに何うしようかと思つて、はツ／＼したんだから、此時もう堪らなくなつたんだ。

いきなり前へ出て、顔を赤くして、

「私が、あの、さがしますから。」

と、口くちの中うちでいふとすぐ抱だいた。下駄げたの泥どろが帯おびにべつたりとついたのも構かまはないで、抱だきあげて、引ひ占しめると、肩かたの處ところへかじりついた。

ぐるツと取巻とりまかれて恥はづかしいので、アタフタし、駈かけ出だしたい位急くらあいそぎあし 足あしで踏ふ出みだすと、お

もいもの抱だいた上うへに、落着おちつかないからなりふりを失うした。

穿物はきものの緒をが弛ゆるんで居ゐたので踏返ふみかへしてばつたり横よこに轉ころぶと姿すがたが亂みだれる。
皆みんなで哄わらと笑わらった。お孝かうは泣なき出だした。

明治三十年八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※表題は底本では、「迷子《まひご》」となっています。

※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年4月24日作成

2016年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

迷子

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>